

平成23年度 重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展

# 東南アジアと琉球



開催期間 平成24年1月28日(土)～2月12日(日)

沖縄県立埋蔵文化財センター

## 目 次

ごあいさつ	1
“東南アジアと琉球”展示概要	2
南海貿易のはじまり	3
南海貿易の隆盛	4
タイ産陶磁器からわかること	5
ベトナム産陶磁器からわかること	6
南海貿易の終焉	7
タイ・ベトナムの陶磁器生産地をたずねて	8
南海貿易が残したもの	10
重要文化財指定基準・指定の名称と指定理由	11
重要文化財首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧	12
引用・参考文献	

### 【凡 例】

1. 本書は、重要文化財公開首里城京の内跡出土品展「東南アジアと琉球」（開催期間 2012[平成24]年1月28日から2月12日）を補完するものとして編集・作成したものである。
2. 企画及び図録原稿の執筆は新垣力、仲座久宜が担当した。
3. 掲載写真の撮影は矢舟章浩、伊佐えりなが行った。また、本書に掲載されている写真・図面等の無断使用は固く禁ずる。
4. 調査報告書に記載されている資料名と本書に記載されている資料名が一部異なるものがある。これは報告書刊行後、新たな研究成果によって詳細が判明したことによるものである。

## ごあいさつ

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、重要文化財「首里城京の内跡出土陶磁器」518点を所蔵しています。これらの資料は14世紀中頃～15世紀中頃に中国、東南アジア、日本で生産された貿易陶磁器で、なかでも中国産の「元青花八宝文大合子」や「紅釉水注」などは、世界でも報告例の少ない貴重な資料です。

首里城京の内跡の発掘調査は、国営首里城公園復元整備事業に伴う遺構確認調査として平成6～9年度まで実施されました。平成6年度の遺構確認調査により倉庫跡（1459年の火災で焼失）の一角から出土したこれらの陶磁器は、我が国の歴史上、意義深く、かつ学術的価値の特に高いものとして平成12年6月27日付で国の重要文化財（考古資料）に指定されました。これらの貴重な品々は東南アジア・朝鮮・日本などとの交易によって琉球王国へもたらされ、琉球国王即位式などの王家の特別な儀礼や祭祀、あるいは中国から来琉した冊封使を歓待する宴などに供されたと思われます。

今回の企画展では、「東南アジアと琉球」と題し、首里城京の内跡出土品の中でも希少な東南アジア産の陶磁器にスポットをあてます。琉球が東南アジアとの中継貿易国として栄え、いわゆる「琉球の大交易時代」を創出した証となる、希少なこれらの品々から、琉球王国を取り巻く近隣諸国との交易や交流など様々な事象を窺い知ることができます。

この機会に、本県文化財の魅力や価値を実感していただき、重要文化財「首里城京の内跡出土陶磁器」に対するみなさまのご理解が深まれば幸いです。

平成24年1月28日

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 大城 慧

# “東南アジアと琉球”展示概要

京の内展は今回で11回目をむかえます。これまで様々なテーマにより中国産陶磁器を中心とした展示を開催してきましたが、今回の展示では初めて東南アジアの陶磁器が主役となります。これらの陶磁器は中国産に比べると数は少なく、見た目も地味なイメージがあります。しかし、そこに焦点をあてると多くのことがわかると同時に、疑問点も浮かび上がってきます。今回の展示では、この観点で陶磁器からみえる背景についても展示することを試みました。

なお、今回の展示において、京の内跡出土品で補えない部分に関しては、より理解を深めもらう目的で、首里城内の各地区及び、首里城周辺の遺跡から出土した資料を加えて展示を行いました。



タイ・ベトナムのおもな窯跡

# 南海貿易のはじまり

現在のところ、琉球と東南アジア諸国との貿易が始まった正確な時期は不明です。しかし文献によると、1389年に琉球から朝鮮へ、また翌90年に琉球から中国へ、琉球にはない南方の産物である胡椒こしょうと蘇木そぼくが運ばれたことが記録されています。このことから、14世紀第4四半期（1375～1400年の間）には琉球と東南アジア諸国との交流・交易が始まっていたと考えられます。

沖縄の遺跡から東南アジア陶磁器が出土するのもこの頃からで、量的には少ないですがタイ産の土器やベトナム産の青磁があります。特に後者はベトナム北部地域で生産されたと考えられる製品で、特徴としては高台内に鉄錆てつきが施される例が多く、チョコレートボトムとも称されます。これらは京の内出土品にはみられませんが、首里城跡の他の地区や、今帰仁城跡、越來ガスクなどから報告されています。これらは日本国内の他地域でも確認されていますが、特に博多・大宰府や壱岐・対馬といった九州北部では出現年代が14世紀中葉と琉球よりも若干早いだけでなく、出土量や製品の種類も豊富です。この状況は、琉球よりも早い時期から日本と東南アジア地域との交流が始まっていたことを示唆しています。琉球は後発でありながらも、既にあった交易の枠組みと、自らの地理的または政治的立場を利用することにより、後に南海貿易の主役を演じることになるのです。



首里城跡出土のベトナム産青磁

# 南海貿易の隆盛

14世紀後半に中国明朝に入貢した琉球は、朝貢関係に基づく進貢貿易を軸としながら、日本や朝鮮、さらには東南アジアとも幅広く貿易を行うようになりました。今日ではこの時代を「琉球の大交易時代」とも呼んでいます。特に15世紀代には東南アジア地域との交流・交易が活発化したようで、この頃に登場する東南アジア陶磁器は前代に比べて出土量が多く、また製品の種類も多様化します。タイ産陶磁器には土器・褐釉陶器・無釉陶器・青磁、ベトナム産陶磁器には青花や白磁などがあり、これらの大半が京の内出土品にみられます。

このように東南アジア陶磁器の出土量が増加する背景には、進貢貿易の存在が考えられます。文献によると、この時期に琉球が東南アジアで交易していたのは暹羅（タイ）・旧港（パレンバン）・爪哇（ジャワ）・満刺加（マラッカ）・蘇門答剌（スマトラ）・安南（ベトナム）・巡達（スンダ）・仏大尼（バタニ）の8ヶ国で、全てが中国と朝貢関係を結んでいます。いわば琉球は身内同士で貿易を行っていたのですが、その理由は進貢貿易に必要な南方物産の胡椒と蘇木を入手するためでした。当時の中国では高級香辛料であった胡椒と、漢方薬の材料であった蘇木の需要が高く、琉球は東南アジアでこれらを大量に購入し、中国へ輸出していたのです。琉球が進貢貿易に備えて南海を往来した結果が、東南アジア陶磁器の増加に繋がったといえます。



14～16世紀の琉球の交易

国名	暹羅	旧港	爪哇	満刺加	蘇門答剌	安南	巡達	仏大尼
~1420年	1419, 20							
1421	1425～	1428,	1430					
~30年	29	30						
1431	1431～	1438,	1438,	40				
~40年	39	40		40				
1441			1441,					
~50年			42					
1451								
~60年								
1461	1464, 65,			1463～				
~70年	69			70	67, 68			
1471	1472, 77			1471,				
~80年	~80			72, 75,				
1481	1481			79, 80				
1491					1492			
~1500年								1498
1501	1509			1503, 9,		1509		
~10年				10				
1511	1512～				1511		1513,	1515,
~20年	15, 17,						16, 19,	16, 19,
	18, 20						20	20
1521	1521, 22,							1526,
~30年	26, 29							29, 30
1531	1533, 36							1536
~40年	~38, 40							
1541	1541, 50							1543
~50年								
1551	1554							
~60年								
1561	1564, 70							
~70年								

文献による東南アジア派船年代一覧表（真栄平 2004 を改変）

# タイ産陶磁器からわかること

この時期の沖縄から出土する東南アジア陶磁器の大多数を占めるのがタイ産陶磁器で、その中でも最も多く確認されているのが褐釉陶器の四耳壺です。生産地は中北部のシーサッチャナライ窯や中部のメナムノイ窯が著名ですが、希少な例としては中部のバンバンブーン窯産や東北部のブリラム窯産の製品もあります。これらは器面に装飾が少なく、サイズが数種類に定型化されていることから、製品自体が商品として扱われたのではなく、何らかの物産を収めた容器、いわゆるコンテナとして副次的に輸入されたと考えられます。これらの蓋として使用された可能性が高いのが土器の蓋で、遺跡出土例では蓋に対応する身（壺形土器）が非常に少ないことや、京の内出土品では褐釉陶器 76 個体・土器蓋 62 個体と各々の個体数が近いことからも類推されます。

ではコンテナの内容が気になるところですが、ほとんどが酒であったと考えられています。当時の琉球はタイとの交易を頻繁に行っていましたが、その際に「香花酒」と呼ばれる酒が輸出されたことが確認されており、琉球でこの酒を飲んだと思われる冊封使の記録も残っています。琉球が何度もタイに赴いたのは胡椒と蘇木を入手するためとされていますが、「香花酒」の存在も理由の一つだったのではないかでしょうか。

ちなみに、遺跡からは上記のいわゆるコンテナとは違う製品も出土しますが量的に少なく、琉球はタイに商品としての陶磁器を求めていなかったといえるかもしれません。



15世紀頃のタイ産陶磁器

# ベトナム産陶磁器からわかること

この時期の沖縄から出土するベトナム産陶磁器の量は少なく、タイ産陶磁器の半分にも及びませんが、特徴として挙げられるのは北部ベトナム産と考えられる青花や白磁といった商品としての陶磁器に限られ、いわゆるコンテナの役割を持つ陶磁器がみられないことです。これはタイ産陶磁器と全く異なる様相であり、交易の形態や目的に起因する結果と考えられます。

文献によると、琉球がベトナムへ渡航したのは1509年の1回だけで、しかも通常の貿易ではなく何らかの謝礼のためであったようです。もちろんこの記録が全てとは限りませんが、タイより交易の頻度が少なかったことは間違いないでしょう。その理由についてはよくわかっていませんが、当時北部ベトナムを支配した黎朝が鎖国的な政策を探ったことも影響していると思われます。

その場合、問題として残るのが陶磁器の存在です。沖縄出土のベトナム産陶磁器は14世紀末～16世紀中葉までの年代幅があり、複数回の貿易で入手したと考えるのが自然です。陶磁器からみる限り、琉球一ベトナム間には記録に残らない交易が多数あった可能性が高いのですが、他の東南アジア地域から間接的に輸入したのではとの説もあり、ベトナム産陶磁器の入手経路はまだ謎に包まれています。



15世紀頃のベトナム産陶磁器

# 南海貿易の終焉

大交易時代を謳歌した琉球の繁栄も長くは続かず、16世紀に入ると海外交易は衰退に向かい、16世紀後半には南海貿易も終焉を迎えます。その要因は幾つかありますが、まず挙げられるのが1501年にマラッカがポルトガルに占領されたことを契機とするヨーロッパ勢力のアジア進出です。琉球が交易した東南アジア諸国は全て朝貢国であったことは前述の通りですが、これにより南海貿易のルートが崩れ、琉球も方針転換を余儀なくされます。加えて中国も海禁政策を緩和し、多くの商人が海外に渡航するようになります。そして日本側でも大友氏や堺が直接東南アジアと貿易を行うようになるなど、琉球が地理的または政治的な立場で優位に立てる時代ではなくなります。それに呼応するように、文献でも1570年にタイへ派船したのを最後に、琉球と東南アジアとの交易記録は途絶えてしまいます。もちろん全ての交流がなくなったのではないでしょうが、回数や頻度が著しく減少したことは確かといえます。

この時期に出土するタイ産陶磁器にはメナムノイ窯産の褐釉陶器・シーサッチャナライ窯産の鉄絵、ベトナム産陶磁器では北部地域で生産されたとみられる白磁・色絵、ミャンマー産の黒釉陶器などがあります。いずれも京の内出土品には確認されませんが、特徴的のはタイ産の鉄絵で、これはコンテナではなく商品として輸入されたと考えられることから、終末期の南海貿易が別の性格を持っていたことがうかがえます。



16世紀頃のタイ・ベトナム産陶磁器

## タイ・ベトナムの陶磁器生産地をたずねて

沖縄の遺跡から出土する東南アジア産の陶磁器は、どのような場所で焼かれたのでしょうか。ここでは平成20・21年度に現地踏査を行ったタイとベトナムの主な窯跡を紹介します（2頁の地図参照）。

### タイ

沖縄で出土する東南アジア陶磁器の大半は、タイ産で占められています。これらの多くは14～16世紀頃まで、タイの中央部を南下するチャオプラヤ川とその支流沿いに点在する窯で焼かれていました。

シーサッチャナライ窯跡はタイの中北部に位置する陶磁器の一大生産地で、褐釉四耳壺のほか青磁の製品も生産していました。この南側には近接してスコータイ窯跡があり、鉄絵の碗や皿、合子、人形などのおもに小物の製品を生産していました。

チャオプラヤ川をさらに南下すると、東にノイ川、西にターチン川へと分岐します。ノイ川沿いには、メナムノイ窯跡があります。褐釉四耳壺や鉢などの大型製品を焼成していた大規模な窯群で、窯跡は博物館内に保存されています。博物館の施設内では、観光客向けに精巧に復刻したミニチュア陶器を製作・販売しており、その技術は今に受け継がれています。

一方、西側のターチン川沿いには、バンバンブーン窯跡があり、一帯には多くの陶器片が散布しています。ここではおもに無釉の壺や鉢を作っていました。特徴的なのは、壺の肩部にスタンプ文を巡らせる点にあり、首里城跡や久米島ヤッチのガマなどで出土例があります。

これらの窯跡は、発掘調査によりいずれも袋状の平窯であったことがわかつておりますり、そこで焼かれた製品はチャオプラヤ川を通じ、多くの物資を各地へもたらしたことが想像できます。また、現地では窯跡そのものを博物館や遺跡公園として整備し、地域の歴史学習の場として盛んに活用している点が印象的でした。



1. シーサッチャナライ・バヤーン窯跡



2. メナムノイ窯跡展示場



3. バンバンブーン窯跡

## ベトナム

沖縄から出土するベトナム産の陶磁器は、青花、白磁、青磁の順で多く出土していますが、タイ産陶磁器に比べると全体量は少ない傾向にあります。これらの陶磁器は、ベトナム北部において生産されていたと考えられますが、いまだ明確な窯跡は発見されていません。

このような中でまずはじめに、古都ハノイの東側に位置するハイズォン市郊外のチューダオ一帯を踏査しました。その結果、付近の畑地に青花を中心とする陶磁器が散布するほか、屋敷の工事中に出土したとする多量の青花や青磁をみせてもらいました。中には窯割れや溶着している製品もあります。これらの製品には、沖縄で出土している染付と類似するものもみられることから、この一帯で焼成していたことが考えられます。また、この地域では古い陶磁器を復刻するために大規模な工場を稼働させており、多くの熟練した職人が繊細な絵付けをする姿をみることができました。

次にハノイの南に位置するバッチャン村へ移動し、調査を行いました。この村では現在も民芸品として色絵や青花などの陶磁器を焼成しており、これが沖縄から出土する色絵のルーツと考えられています。しかし、窯跡は発見されておらず、詳細はわかつていません。

そのほか沖縄の遺跡からは、白磁の碗や皿・瓶のほか、極薄の杯や蓋などの製品も出土していますが、踏査したチューダオやバッチャン一帯において確認することができませんでした。また、沖縄出土ベトナム産陶磁器の出土傾向で特徴的なのは、堺(大阪)や大友(大分)などで出土する陶製の壺や鉢が出土しない点にあります。この陶器は、ベトナム中部で焼成されていたことが発掘調査によりわかつています。



1. 住宅工事中に出土した陶磁器（チューダオ）



2. チューダオの陶磁器工場



3. バッチャン村の陶磁器工房



4. バッチャン焼のサヤ詰め状況

## 南海貿易が残したもの

琉球が東南アジア諸国と貿易を行っていた期間はそれほど長くはありません。それでも、南海貿易は琉球に有形無形の「モノ」を多く残しました。ここではその中から、有形のモノとして「胡椒」を、無形のモノとして「陶器壺の形」をそれぞれ説明します。

まず「胡椒」ですが、現在沖縄では東南アジア原産のヒハツモドキが栽培されており、特に八重山では香辛料として名高く、人気の特産品でもあります。この植物は一般に沖縄本島では「フィーファチ」、宮古では「ビバーツ」、八重山では「ビバチ」と呼びますが、興味深いのは発音が胡椒の原語である「ビバリ（サンスクリット語で長胡椒の意味）」に近いことです。これは、胡椒の原産地である東南アジア地域との歴史的な繋がり、つまり琉球が当該地域から胡椒を輸入していた時代があったことの証といえるでしょう。ちなみに、英語の胡椒「ペッパー」もサンスクリット語が訛ったものとされています。

次に「陶器壺の形」です。文献によると琉球で陶器生産が開始されたのは1616年と伝わっています。この頃つくられた大型壺の器形はタイ産褐釉陶器の大型壺に非常によく似ていますが、タイ産褐釉陶器の琉球への輸入は16世紀中葉で終了したと考えられています。このことから、輸入が途絶えて約1世紀経過した時代でも、「タイ産褐釉陶器の大型壺」の存在や形態的特徴がブランドとしての魅力を持っていたことがうかがえます。



モデルとなったタイ産褐釉陶器



沖縄産陶器（ヤッチのガマ出土）

## 重要文化財指定基準

### ◎ 考古資料の部

#### 重要文化財

- 一 土器、石器、木器、骨角牙器、玉その他縄文時代及びそれ以前の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 二 銅鑄、銅劍、銅鉢その他弥生時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 三 古墳の出土品その他古墳時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 四 宮殿、官衛・寺院跡、墓、経塚等の出土品その他飛鳥・奈良時代以後の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 五 渡来品で我が国の歴史上意義が深く、かつ、学術的価値の特に高いもの

※○国宝及び重要文化財指定基準、・(中略)・基準(抄)(昭和26年5月10日文化財保護委員会 告示第2号)【最終改正】平成8年10月26日文部省告示第185号より一部抜粋。

## 重要文化財指定の名称と指定理由

### (考古資料の部)

名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518点

附 一、金属製品 一括

附 一、ガラス玉 一括

所 有 者：沖縄県（沖縄県立埋蔵文化財センター保管）

（府保美第3の3号平成12年6月27日付け「重要文化財の指定について」  
文化庁次長より沖縄県教育委員会教育長あて通知より作成）

説 明 文： 尚氏第一王統時代

本件は、沖縄県那覇市首里当蔵に所在する首里城内郭の南西部にあたる、京の内跡の建物跡から出土した陶磁器の一括である。

「京の内」は靈力のある聖域という意味があり、なかに存在した首里森御嶽は琉球王国の最高神女である間得大君が神を迎えて、歴代の琉球国王に託宣を下した拝所である。

この京の内跡の発掘調査は国営沖縄記念公園首里城地区整備事業の一環として、平成6～7年度に実施され、約2000平方メートルが調査された。その結果、この建物は天順3年(1459)に焼失したことが判明した。

出土した陶磁器は、中国産の青磁、白磁、明代の染付を中心に、元代の染付、色絵、褐釉陶・磁器、瑠璃釉、紅釉など、タイ産の褐釉陶器、ベトナム陶器、日本の備前陶器等で構成されている。これらは概ね14世紀中頃から15世紀中葉のものである。なかでも紅釉水注は、北京の故宫博物院に2点と景徳鎮窯跡出土の破片1点が確認されているのみである。また、元染付の合子は遺存する部分は少ないが、きわめて貴重な出土例である。

また、中国産の陶磁器を中心に、タイ、ベトナム、日本などアジアの主要な陶磁器の生産地から交易によって集められたものが出土している。

琉球王国は首里城正殿前につられていた「万国津梁鐘」の銘文に「船舶を諸国と結ぶ小橋とすることによって異国の宝物類が國中に充満する」(訳文の趣旨)とあるように、中継貿易で栄えた琉球王国の繁栄ぶりを如実に示す貴重な一括資料である。

なおこの建物跡からは、兜鉢、小札、鎖帷子、釘、鍔等の金属製品、火災の際に溶着したガラス小玉塊が出土しており、あわせて保存を図りたい。

（文化庁文化財保護部監修『月刊文化財』平成12年6月号より抜粋）

※ 官報告示：平成12年6月27日付け文部省告示第120号

※ 文化財保護法(昭和25年法律第214号)第27条第1項の規定により、平成12年6月27日付けで重要文化財に指定。

# 重要文化財 首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧

## 重要文化財 考古資料の部

指定名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518 点

附 一、金属製品 一括  
附 一、ガラス玉 一括

### 重要文化財 陶磁器内訳

種類	器種：点数	器種：点数	器種：点数
青磁 (289点)	碗 103	皿 117	盤 32
	壺 20	大花瓶 2	馬上杯 1
	水注 3	瓶 5	香炉 3
	水滴 1	花盆台 1	鉢 1
白磁 (33点)	碗 14	皿 11	杯 2
	水注 1	壺 1	瓶 4
元染付 (2点)	馬上杯 1	大合子 1	
明染付 (58点)	碗 32	皿 4	杯 3
	鉢 1	瓶 14	壺 4
色絵 (3点)	碗 2	皿 1	
紅釉 (1点)	水注 1		
瑠璃釉 (2点)	碗 1	瓶 1	
褐釉磁器 (1点)	碗 1		
褐釉陶器 (35点)	壺 30	水注 1	鉢 1
	壺蓋 1	特殊壺 1	
	蓋 1		
白釉陶器 (3点)	壺 2	水注 1	
タイ産褐釉陶器 (55点)	壺 55		
タイ産半練土器 (22点)	蓋 18	壺 4	
ベトナム陶器 (3点)	瓶 1	水注 2	
備前ほか (本土産) (6点)	擂鉢 1	かめ甕 3	壺 2
瓦質土器 (沖縄産) (5点)	蓋 5		
合計		518点	

## 【引用・参考文献】

- 新垣力 2011 「陶磁器からみた琉球の南海貿易－東南アジア産陶磁器・華南三彩を中心にして－」『第32回日本貿易陶磁研究集会(大分大会)資料集 南蛮貿易と陶磁器』日本貿易陶磁研究会・大分市教育委員会
- 内田晶子・高瀬恭子・池内望子 2009 『琉球弧巻書@ アジアの海の古琉球－東南アジア・朝鮮・琉球』柏樹書林
- 沖縄県教育庁文化課(編) 1998 『沖縄県文化財調査報告書第132集 首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)－』沖縄県教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター(編) 2010 『平成22年度 重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展 首里城“もの”がたり』
- 金武正紀 2004 『沖縄から出土したタイ・ベトナム陶磁』『シンポジウム 陶磁器が語る交流－九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器』東南アジア考古学会
- 財団法人富山美術館(編) 1997 『故木丁コレクション 東南アジア古陶磁展(Ⅳ)』
- 佐々木達夫・吉良文男・佐々木花江 2003 『マンマー陶磁の発見』『貿易陶磁研究』第23号 日本貿易陶磁研究会
- 瀬戸哲也 2010 『琉球における考古学的成果』『博多研究会20周年記念シンポジウム 中世後期の東アジアと博多 報告資料集』博多研究会20周年シンポジウム実行委員会
- 田名真之 2004 『4章 海外交易と琉球』『原史 47 沖縄県の歴史』山川出版社
- 續伸一郎 2011 『那覇源都市遺跡における流通の様相－貿易陶磁器からみた琉球貿易と朱印船貿易－』『考古学と室町・戦国期の流通－瀬戸内海とアジアを結ぶ道－』高志書院
- トン・チュン・ティン(訳:菊池誠一) 2000 『ベトナム海域で引き揚げられた陶磁器』『近世日越交流史－日本町・陶磁器』柏書房
- 那覇市立壱屋焼物博物館(編) 1998 『那覇市立壱屋焼物博物館開館記念特別展 陶磁器に見る大交易時代の沖縄とアジア』那覇市教育委員会
- 西村昌也・西野範子 2005 『ヴェトナム施釉陶器の技術・形態的視点からの分類と編年－10世紀から20世紀の碗皿資料を中心に－』『上智アジア学』第23号 上智大学アジア文化研究所
- 真栄平房昭 1991 『10 南蛮貿易とその時代』『新琉球史－古琉球編－』琉球新報社
- 向井亘 2008 『第3章 海域アジアの貿易陶磁とコンテナ陶磁』『九大アジア叢書11 モノから見た海域アジア史－モンゴル～宋元時代のアジアと日本の交流～』九州大学出版会
- 向井亘 2009 『タイの陶磁史(二)－ブリラム陶磁器－』『陶説』第676号 日本陶磁協会
- 森村健一 1995 『日本における遺跡出土のタイ陶磁器』『東洋陶磁』第23・24号 東洋陶磁学会
- 森本朝子 2000 『日本出土の東南アジア産陶磁の様相』『貿易陶磁研究』第20号 日本貿易陶磁研究会
- 森本朝子・田中克子 2004 『沖縄出土の貿易陶磁の問題点－中国粗製白磁とベトナム初期貿易陶磁－』『グスク文化を考える 世界遺産国際シンポジウム(東アジアの城郭遺跡を比較して)の記録』新人物往来社
- 矢島律子 1995 『ベトナム青磁について－その特色と問題点－』『東洋陶磁』第23・24号 東洋陶磁学会
- 吉田豊 2009 『近世初頭の貿易商人』『関西近世考古学研究』17 近世初頭の海外貿易と陶磁器』関西近世考古学研究会

---

重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展

## 東南アジアと琉球

発行年月日 平成24年(2012)1月28日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

URL <http://www.maizou-okinawa.gr.jp/>

印 刷 (株)東洋企画印刷

〒901-0305 沖縄県糸満市西崎町4-21-5

TEL 098-995-4444 FAX 098-995-4444

---



## 関連文化講座

### 第49回文化講座

平成24年1月28日(土) 午後1時30分～4時

「大交易時代を支えたタイ陶磁」

講師：向井 互（金沢大学国際文化資源学研究センター）

「海を渡ったベトナム陶磁」

講師：矢島 律子（町田市立博物館）

※先着140名 予約等不要・参加無料

### ギャラリートーク

平成24年2月4日(土) 午前の部 11時～11時30分

午後の部 14時～14時30分

解説担当：新川 力（当センター）

仲原 久宜（当センター）

※予約等不要・参加無料

## 今後の催しのご案内

### 第50回文化講座

平成24年2月12日(日) 午後1時30分 開始

「聖域へのアプローチ

～考古学から何が見えてきたのか～」

コーディネーター：當貫 翔一（元沖縄県立博物館館長）

講師：大城 亜季（南城市観光・文化振興課）

全城 亜季（当センター）

山本 正樹（当センター）

※先着140名 予約等不要・参加無料

### 企画展

平成24年2月21日(祝)～3月11日(日)

沖縄県有形文化財（考古資料）指揮記念

「古我地原貝塚・下田原貝塚出土品展」

平成23年11月16日、「古我地原貝塚（ううま市石川）」

および「下田原貝塚（竹富町波照間島）」の出土品が、考古

資料としては初めて沖縄県の有形文化財に指定されました。

企画展はこれを記念し、貴重な出土品を県民のみなさま

にいち早く公開いたします。

### 第51回文化講座

平成24年3月10日(土)

「指定の経緯と内容について」

講 師：上地 博（県教育文化財課主任専門員）

「古我地原貝塚について（仮題）」

講 師：島袋 洋（県教育文化財課副参事）

「下田原貝塚について（仮題）」

講 師：全城 亜季（竹富町波照間島調査班長）

※先着140名 予約等不要・参加無料

開所時間：午前9時～午後5時（入所は午後4時30分まで）

休 所：毎週月曜日・年末年始（12月28日～1月4日）

国民の祝日（子供の日・文化の日を除く）

慰靈の日（6月23日）

※祝日と月曜日が重なった時は、翌日の火曜日も

休所・その他臨時休所あり

